

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

# リチャード二世の修辞法の研究

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 西田 義和   |
| 雑誌名 | 埼玉学園大学紀要．経営学部篇  |
| 巻   | 9   |
| ページ | 191-199   |
| 発行年 | 2009-12-01  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000662/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000662/</a> |



# リチャード二世の修辞法の研究

## A Study on the Rhetoric of *Richard II*

西 田 義 和

NISHIDA, Yoshikazu

### I

英仏100年戦争における国民的英雄となったBlack Princeの長男として、祖父Edward IIの跡を継ぎ10歳にして即位したのがRichard IIある。その治世も終わりに近い1398年に起きた事件をもって劇Richard IIが開幕する。

外見から見た場合、シェイクスピアからの一節の差異を示す主要な特徴は、それが散文で書かれたか韻文で書かれたか、という点だと思われるかもしれない。しかし、これはそれ程単純な問題ではない。というのはシェイクスピアの作品の多くは散文で書かれているのがほとんどであるのに、筆者がこれから小論文を書こうとする『リチャード二世』には、散文はほとんど用いられていないからである。

多くの批評家がこの作品を喜劇と言わないで、悲劇であると言っているのはこの作品にあらわれた言葉や表面的な言動から判断すると、リチャードは卑小であるが彼の言動の陰から伝わってくる苦悶の顫動に、王位から失墜した主人公が心中に起こる強烈な熱情に対して抵抗力を失う悲劇の根本的な性格が現れていることを感じているためである。

リチャードは国王としての無能力のないために退位におこまわれるのであるが、リ

チャードはいわば中世最後の王として、王権神授を報じており、いかなる理由にせよ自分に背くことは者はゆるせないのである。この作品は上演されるのは比較的すくないのであるが、シェイクスピアはこの作品の中で中世で最後の国王となったりリチャード二世の国王そのものを強く意識して、国王の真価を問うている『リチャード二世』(Richard II) に的を絞って、そこに出ている様々な修辞法を考えてみたい。

### II

#### 1. 脚韻 (rhyme)

脚韻は特に、韻文に見られる一種の音声的反響である。もっと正確に言うならば音素の一致である。

英語の脚韻は通常強勢のある母音から語末までの音が同じで、語頭の音が異なっている二つの語(単音節語であることが多い)によって形成される。次の一説は王リチャード二世の叔父のゴントの台詞である。

Things sweet to taste prove in digestion  
sour.

You urged me as a judge; but I had rather  
You would have bid me argue like a

father.

O, had it been a stranger, not my child,  
To smooth his fault I should have been  
more mild:

A partial slander sought I to avoid,  
And in the sentence my own life  
destroy'd.

Alas, I look'd when some of you should  
say,

I was too strict to make mine own away;  
But you gave leave to my unwilling  
tongue

Against my will to do myself this wrong.  
(1.3.236-46)

(舌に甘いものも腹に収まれば苦いこと  
もある。

陛下は私を裁き手になさった、私として  
はその裁決に

父親として意見をのべさせていただきた  
かったのに。

ああ、あれがわが子ではなく他人であれ  
ばよかった、

であればもっと寛大に、罪を軽くして  
やっていた。

ただ身びいきのそしりを避けようとして、  
私は

あのような宣告をくだし、わが身を滅ぼ  
したのだ、結局は。

実はあるとき、私は心から期待していた、  
だれかがきつと

わが子を追放するのはきびしすぎると  
いつてくれるものと。

ところが心にもない私の裁決をご一同は  
よしとされた、

そのために心ならずとも私はみずからを  
破滅させてしまった。)

(2) Or my divine soul answer it in heaven.

Thou art a traitor and a miscreant,  
Too good to be so and too bad to live,  
Since the more fair and crystal is the sky,  
The uglier seem the clouds that in it fly.  
Once more, the more to aggravate the  
note,

With a foul traitor's name stuff I thy  
throat;

And wish, so please my sovereign—ere I  
move,

What my tongue speaks my right drawn  
sword may prove. (1.1.38-47)

(天上においてはわが靈魂が責任をとる  
だろう。

おまえは謀反人だ、裏切り者だ、そこま  
で落ちるには

身分のよすぎる身ではあるが、生かして  
おくには悪すぎる。

それも当然だろう、大空が美しく澄み  
渡っていたら、

そこにただよう雲はいっそう醜く見える  
ものだから。

もう一度、醜い謀反人という名を、おま  
えの喉に

押しこんでやる、この屈辱でグーの音も  
出ぬように。

さらに、陛下のお許しさえあれば、ただ  
いまの申し条、

この場を去らず正義の剣をもって立証し  
てみせよう。)

(3) I'll answer thee in any fair degree

Or chivalrous design of knightly trial;  
And when I mount, alive may I not light,  
If I be traitor or unjustly fight! (1.1.80-83)

(いやしくも騎士道の名誉にかなうかぎ

り、おれは  
いかなる決闘にも喜んで相手になってや  
る、  
馬で戦うならその馬から生きておりはし  
まい、たとえば  
おれが謀反人であったいり、不正な試験  
をしたりすれば！)

上記(1)では行末の脚韻のため、対句的  
な形式になっており、それが統語法や構文を  
支配して、格言または警句のような表現と  
なっている台詞である。

(2)においても非常に多くの脚韻を用いて  
いる。この辺の箇所は感情を激するとき詩的  
になると自然と脚韻を踏む傾向になる場合が  
多くなるのでそのようになったのであろう。  
“crystal” という語はこの箇所ではばくぜん  
と ‘bright’ ぐらいの意味である。この語は、  
元 来old astronomyで い わ ゆ るcrystalline  
heaven について言うときの言葉である。

(3) の “light” はここではalightと同じ意  
味である。次の行の “fight” は韻を踏んでいる。

## 2. 四行連句 (quatrains)

この用法はシェイクスピアの作品には比較  
的少ないが、この作品も多く用いられている  
わけではないが、例文を引用して少し考えて  
みたい。

- (1) He that no more must say is listen'd more  
Than they whom youth and ease have  
taught to glose;  
More are men's ends mark'd than their  
lives before:  
The setting sun, and music at the close,

(2.1.9-12)  
(これをかぎりに口のきけなくなるもの  
の言うことは、ただ  
調子よくお世辞を言う若者のことば以上  
に傾聴されるのだ。  
人の臨終はそれまでの全生涯よりも注目  
を浴びるものだ、  
沈まんとする日の光、終らんとする楽の  
音も同じだ、)

- (2) But now the blood of twenty thousand  
men  
Did triumph in my face, and they are fled;  
And, till so much blood thither come  
again,  
Have I not reason to look pale and dead?  
(3.2.76-79)  
(いままでは二万の兵士の血が意気高ら  
かに  
おれの頬を染めていた、その彼らが逃げ  
たのだ、  
それだけの血がふたたびもどってくるま  
で、おれが  
死人のように青い顔をしたとて不思議は  
ないだろう。

- (3) Men judge by the complexion of the sky  
The state and inclination of the day;  
So may you by my dull and heavy eye:  
My tongue hath but a heavier tale to say.  
(3.2.194-197)  
(人は空の色、曇のたたずまいによって  
その日の天候を判断いたします。した  
がって  
陛下も、私の沈んだ悲しい目の色によっ  
て、  
私の舌が申さねばならぬ悲しい話をご推  
察なさって、

お聞きとり願います。)

上記(1)は第二幕第一場イーリー司教の邸で、冒頭から少し入った箇所では病気の叔父のゴーストと同じく叔父のヨークの二人の対話の箇所である。上記の引用文はゴーストの話の一部である。ここの引用文の“whom youth and ease have taught to glose”は暗に王リチャード二世の仲間のことを指しているのである。特に、“The setting sun”は日没の美しさを表している。

(2)の文を見ると非常に迫力のある文になっていることに気がつくと思われる。それは王リチャードの言葉であり、四行連句がうまく形式のとり韻を踏んでいるからである。

(3)の文は式武官で騎士スティーヴン・スクループの引用の一部であるが、やはりこの文も(2)の文と同様に騎士の言葉と四行連句の韻の踏ませかたによって、非常に迫力のある文となっている。

### 3. 二誌一意、重言法 (Hendiadys)

この用法は「二つのものによる一つのもの」というギリシャ語に由来しており、1589年にパトナムが「対の対象」と呼んだもので、比較的あまり知られていない修辞学上の文彩である。要するに二つの語が形式上は対等であるが、意味上は主従の関係にあって、and等によって連結されているものである。

- (1) Take Hereford's rights away, and take  
from Time  
His charters and his customary rights;  
Let not to-morrow then ensue to-day;  
Be not thyself, for how art thou a king  
But by fair sequence and succession?  
(2.1.195-199)

(ヘリフォードからその権利を召上げられることは、

「時」からその固有の特権をとりあげられることだ、

明日という日を今日のあとに続いてこさせないことだ。

そうなればあなたもあなたご自身ではなくなられよう、

王になられたのは、時の正当な連続によってなのであるから。)

- (2) But I bethink me what a weary way  
From Ravenspurgh to Cotswold will be  
found  
In Ross and Willoughby, wanting your  
company,  
Which, I protest, hath very much beguiled  
The tediousness and process of my travel:  
(2.3.8-12)  
(しかし、ロスとウイロビーは、公爵と  
ご一緒でないために、  
レーヴンスパークからコッツウォルドま  
での道を  
さだめしつらい思いで歩いていることで  
しょう、  
私はさいわいごいっしょであったために、  
ずいぶん  
長い道中の退屈さをまぎらすこともでき  
ましたが。)

- (3) Besides I say and will in battle prove,  
Or here or elsewhere to the furthest  
verge  
That ever was survey'd by English eye,  
That all the treasons for these eighteen  
years  
Complotted and contrived in this land  
Fetch from false Mowbray their first head

and spring. (1.1.92-97)

(これが卑劣な謀反人のふるまいでなくてなんでしょう？

のみならず、この十八年間、いやしくもわが国において

もくろまれ、たくらまれた謀反は、ことごとく

この卑劣なモーブレーを源泉としております。)

- (4) Harry of Hereford, Lancaster and Derby,  
Stands here for God, his sovereign and himself,

On pain to be found false and recreant,

To prove the Duke of Norfolk, Thomas Mowbray,

A traitor to his God, his king and him;

And dares him to set forward to the fight.

(1.3.104-109)

(ヘリフォード、ランカスター、ならびにダービーの公爵ハリーは、

ノーフォーク公爵トマス・モーブレーが、神にたいし、王にたいし、彼にたいして

反逆者たることを、

神にたいし、陛下にたいし、彼自身にたいして立証すべく、

万一破れたる時は虚像、卑怯の汚名を受ける覚悟にて、

ここにあって挑戦し、決闘をうながすものであります。)

上記 (1) は王リチャードと叔父のヨークの対話でこの場面はヨークの長い話の一部の箇所である。この中で上の二行つまり引用してみると、“Take Hereford’s rights…his customary rights”は「ヘリフォードからその権利を奪うのは時からその特許状や世襲的権

利を取り上げるのと同じこと」の意味である。

構文的には ‘Spare the rod and spoil the child’ と同じであると考えてよい。最後の行の “sequence” と “succession” は同じ意味に使用されていていわばこの項目に掲げている用法と考えてよい。

(2) の場面はグロスターシアの荒野でボリングブルックとノーサンバランドが軍勢を率い

て登場して、この二人の対話の中でノーサンバランドの話の一部である。この中で Costswold はシェイクスピアが誕生した Stratford-upon-avon の南部一帯の低い丘陵を指している。そして最後の行の “tediousness and process” が Hendiadys の用法である。

(3) の “these eighteen years” は 1398 年 4 月のことで、18 年間というのは Wat Tyler の insurrection 以来の年月をさす。“Complotted and contrived” と “head and spring” がいわゆる Hendiadys の用法である。

(4) ここは登場人物がたくさん集まって、そのうちの一人伝命官 1 の台詞である。また試合開始前のラッパの音が鳴りひびき、彼の発言の気持ちがよく現れている。“false and recreant” は同じ意味の言葉を重ねてもちいているのであって一種の Hendiadys である。

#### 4. 心象、イメージ (Imagery)

この作品についてシェイクスピアを研究している人のなかには、シェイクスピアの他の作品に見られないほどの独自の統一された調子があることを指摘している人もいる。

- (1) Finds brotherhood in thee no sharper spur?

Hath love in thy old blood no living fire?

Edward's seven sons, whereof thyself art  
one,

Were as seven vials of his sacred blood,  
Or seven fair branches springing from  
one root.

Some of those seven are dried by the  
nature's course,

Some of those branches by the Destinies  
cut;

But Thomas my dear lord, my life, my  
Gloucester,

One vial full of Edward's sacred blood,  
One flourishing branch of his most royal  
root,

Is crack'd and all the precious liquor spilt,  
Is hack'd down, and his summer leaves all  
faded,

By envy's hand, and murder's bloody axe.

Ah, Gaunt, his blood was thine! (1.2.9-  
22)

(肉親の情けもそれ以上あなたを駆り立  
てないのですか？

その年老いた血には生きた火を燃やす愛  
がないのですか？

エドワード王の七人の王子は、あなたも  
そのお一人ですが、

いわば王の神聖な血潮をたたえた七つの  
瓶、

あるいは一つの根から生まれ育った七本  
の枝、

その瓶のなかには自然のなりゆきで干し  
上がったものもあり、

その枝のなかには運命の手で切り取られ  
たものもある、

だがトマスは、私の夫、私の命、わたし  
のグロスターは、

エドワード王の神聖な血潮をなみなみと  
たたえた瓶、

この上なく尊い根から生い茂った美しい  
枝は、

悪意の手によってうち砕かれ、そのかけ  
がえのない血潮を

一滴あまさず大地にこぼし、残忍な斧に  
よって切り倒され、

その夏のさかりの緑葉もことごとく枯れ  
はてたのです。

ゴートン様、あの人の血はあなたの血で  
す！)

(2) A thousand flatterers sit within thy  
crown,

Whose compass is no bigger than thy  
head,

And yet, incaged in so small a verge,

The waste is no whit lesser than land.  
(2.1.100-103)

(あなたの王冠の内部には無数の追従者  
が巣くっている、

その領域はたしかにあなたの頭ほどの大  
きさでしかない、

だが、そのような狭いところに閉じこめ  
られていながら、

そのおよぼす害はあなたの王国全土を荒  
廃せしめるだろう。)

(2) But ere the crown he looks for live in  
peace,

Ten thousand bloody crowns of mother's  
sons

Shall ill become the flower of England's  
face,

Change the complexion of her maid-pale  
peace

To scarlet indignation and bedew

Her pastures' grass with faithful English  
blood. (3.3.95-100)

(だが、王冠が彼の頭に平和に納まる前に、  
何千何万という母親の息子たちがその頭  
を失い、  
このイングランドの花の顔も醜く汚され、  
処女の白さの平和の顔色は憤怒の真紅に  
変わり、  
牧場の緑の草には、忠実なイギリス人の  
血が  
露としたたるだろう。彼にそう言ってや  
れ。)

(3) A jewel in ten-times barr'd-up chest

Is a bold sprit in a loyal breast.

Mine honour is my life, both grow in one,  
Take honour from me, and my life is  
done. (1.1.180-183)

(忠臣の胸に宿る勇気こそ最も美しい宝  
石です、  
それは十重二十重の飾り忠心にあるから  
です。  
名誉は私のいのちです。つまり、名誉を  
失うことは  
いのちを失うことです、少なくとも私に  
とりましては。)

上記 (1) では2行目の“blood”という語  
が最後の行まで5回も用いられている。この  
“blood”という語はそれほどこの箇所では重  
みがあるとは思わない。だが、この意味の限  
定されない曖昧さが新たなものをこの作品に  
与えている。特に、この作品において、この  
bloodという語は独自の用法を持っている。  
それは注目すべきシンボルを含んでいる。  
シェイクスピアは彼の原点からヒントを得て、  
リチャードの異常に蒼白になったり、顔をあ

かくする傾向をたくみに強調している。これ  
は特に、心象の展開にみられ、*blood*のイメ  
ジは重要な役割を果たしている。(2) では王  
者のシンボルとしてのCrown (王冠) のイメ  
ジは勿論、すべての歴史劇を通じてよくある  
のである。しかし、この作品においてはイメ  
ジの鮮やかさは、その象徴のこの作品の壮大  
な主題に対する適切さと共に、単純で、慣習  
的な域を超えその何ともいえず雰囲気が発揮  
されて、の一層効果的にされている。そして  
(3) では王冠のイメジは、この作品の詩的な  
構成の中で、jewel (宝石) のイメジと組み  
合わされてますます鮮やかなものにされて  
いっている。

これまで紹介してきたイメジは一部である  
が、この作品を読み直してみると、この作品  
ではいかにして多くのイメジの主題が分布さ  
れており、またそれが新たなイメジを作りだ  
しているかがわかるはずである。なお、ここ  
では紙数の関係もあり、そのすべてを紹介す  
る事も踏まえて、間接的に遠うまわしにこれ  
らの主題に結びついたものや(結びつきそう  
なものも含めて) またこれらの主題を暗示し  
ていると思われるものは省略させていただい  
た。

## 5. 動詞の省略

反復法や文のリズムを整えるために様々な  
修辞法を用いたシェイクスピアは文を作る上  
で重要な要素である動詞の省略法を用いてい  
る。

(1) And shortly mean to touch our not  
northern shore.

Perhaps they had ere this, but that they  
stay

The first departing of the king for Ireland.



(2.1.288-290)

(まもなくわが国の北海岸に到着されるはずだという。

いや、すでに上陸されたかもしれぬ、とすれば

王のアイランド出征を待っておられるのだ。)

(2) Thoughts tending to content flatter themselves

That they are not the first of fortune's slaves,

Nor shall not be the last—like silly beggars.

Who, sitting in the stocks, refuge their shame,

That many have and others must sit there; (5.5.23-27)

(自己満足にふける思想は、おのれにへつらって、

運命の奴隷となったのは自分たちが最初ではないし、

最後でもないと思う。ちょうど愚かな乞食が、

さらし台にあって、ここにさらされたものは

自分だけではないと考えて、恥にかくれ家を

与えるようなものだ。)

上記の(1)では2行目の“had”の次に“meant”が省略されている。また意味的に考えるならば“had”の次に“would have touched”を挿入してもよいのではないかと思われる。(2)では最後の行の“have”の次に挿入する語は“sat”しか考えられない。

このように動詞を省略することはかなり勇

気が必要であるが、シェイクスピアはそれによって少しも意味の明晰さを犠牲にする事なくして、その目的を達成したという事ができる。

### Ⅲ

以上*Richard II*の中に現れた言葉やレトリックについて考察した。今回も決して満足のいかない点が多少存在するので少し不満を感じる。

修辞法は我々が英語を学ぶ時に、一段と英語に対する興味と関心を増してくれるものである。十六世紀の英国の作家たち特に、シェイクスピアが新しい表現の手段と効果を求めて、学び、応用した修辞法の多くの技巧は、今なお現代英語の中に生きているのを知ることとは非常に興味深いことである。

従って、初期の作品から豊富なレトリック的な装飾を施されたものが多いのは当然なことである。後にヘンリー四世になるヘンリー・ボリングブルックがこの『リチャード二世』の結びの箇所では自分の心境を語っている場面があるのでそれを紹介してこの小論文の結びとする。

They love not poison that do poison need,  
Nor do I thee. Though I did wish him dead,  
I hate the murtherer, love him murthered.  
.....

Lords, I protest my soul is full of woe  
That blood should sprinkle me to make me grow.

Come mourn with me for what I do lament,  
And put on sullen black incontinent.

I'll make a voyage to the Holy Land,  
To wash this blood off from my guilty hand.

March sadly after; grace my mournings here

In weeping after this untimely bier. (5.6.38-52)

(毒を必要とするものも毒を愛しはせぬ、私もまた  
おまえを愛しはせぬ。たしかに私は彼を望んだ、  
だが殺したものは憎む、愛するのは殺されたもののほうだ。

.....

諸卿、誓って言うが、いま私の魂は悲しみで  
いっぱいだ、

この身の栄達のために、この身は血の洗礼を  
浴びたのだ。

どうか私がその死を悼む人を惜しんで、私に  
習い、

黒い喪服に身を包み哀悼の意を表していただ  
きたい。

私は聖地遠征の十字軍に参加しようと思う、  
すみやかに

私の罪の手からこの血を洗い清めるために。

柩を守って厳粛に行進せよ。このときならぬ  
葬列に従い、

諸卿も涙をそそいで私の悲しみを飾っていた  
だきたい。)

荒木一雄他『シェイクスピアの発音と文法』荒竹出版、1980年。

大山敏子『シェイクスピアの心象研究』篠崎書林、1953年。

梅田倍男『シェイクスピアのレトリック』英宝社、2005年。

石橋敬太郎『シェイクスピアの英国史劇』金星堂、2000年。

## 参考資料

テキストは*King Richard II the Arden Shakespeare Complete Works* (1988) pp.

671-700より採った。日本語訳はほとんど白水社の

小田島 雄志訳を使わせていただいた。

池田拓郎『英語文体論』研究社、1992年。

倉橋健『シェイクスピア辞典』東京堂出版、1985年。

大塚高信『シェイクスピアの文法』研究社、1985年。

東田千秋『英文学の言語と文体』三省堂。1957年。

山本忠雄『シェイクスピアの言語と表現』南雲堂、1967年。